Grand Gendai

グランド現代百科事典

Grand Gendai

9

キコウシ—キリシ

学研

グランド現代百科事典

Grand Gendai

9

キコウシ—キリシ

1983年6月1日　改訂新版第1刷発行
1984年2月1日　改訂新版第2刷発行
全巻セット定価　218,000円

編集・発行人——鈴木泰二
発行所——株式会社**学習研究社**(学研)
東京都大田区上池台4-40-5 〒145
電話　東京(03)720-1111（大代表）
振替　東京8-142930
印刷——凸版印刷株式会社
表紙クロス——東洋クロス株式会社
ケース見返し用紙——富士共和製紙株式会社
本文用紙——三菱製紙株式会社
箔押——有限会社斎藤商会
製本——凸版製本株式会社
製函——高田紙器工業所

©GAKKEN　1983
＊本書内容の無断複写を禁ず

＊この本に関するお問合せ，製本上のミスなどがございましたら，下記あてにお願いいたします。
文書は　東京都大田区上池台4－40－5（〒145）
学研・ユーザーサービス部「グランド現代百科」係
電話は　東京（03）720－1111（大代表）

本書に掲載した地図は，建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図，20万分の1地勢図を使用して調製したものである。

Printed in Japan

161 259
ISBN4-05-150084-5

キャプテン　手軽で便利な情報システムとして，すでに実験サービスが行なわれている。　写真／西濱剛

キャプテンシステム

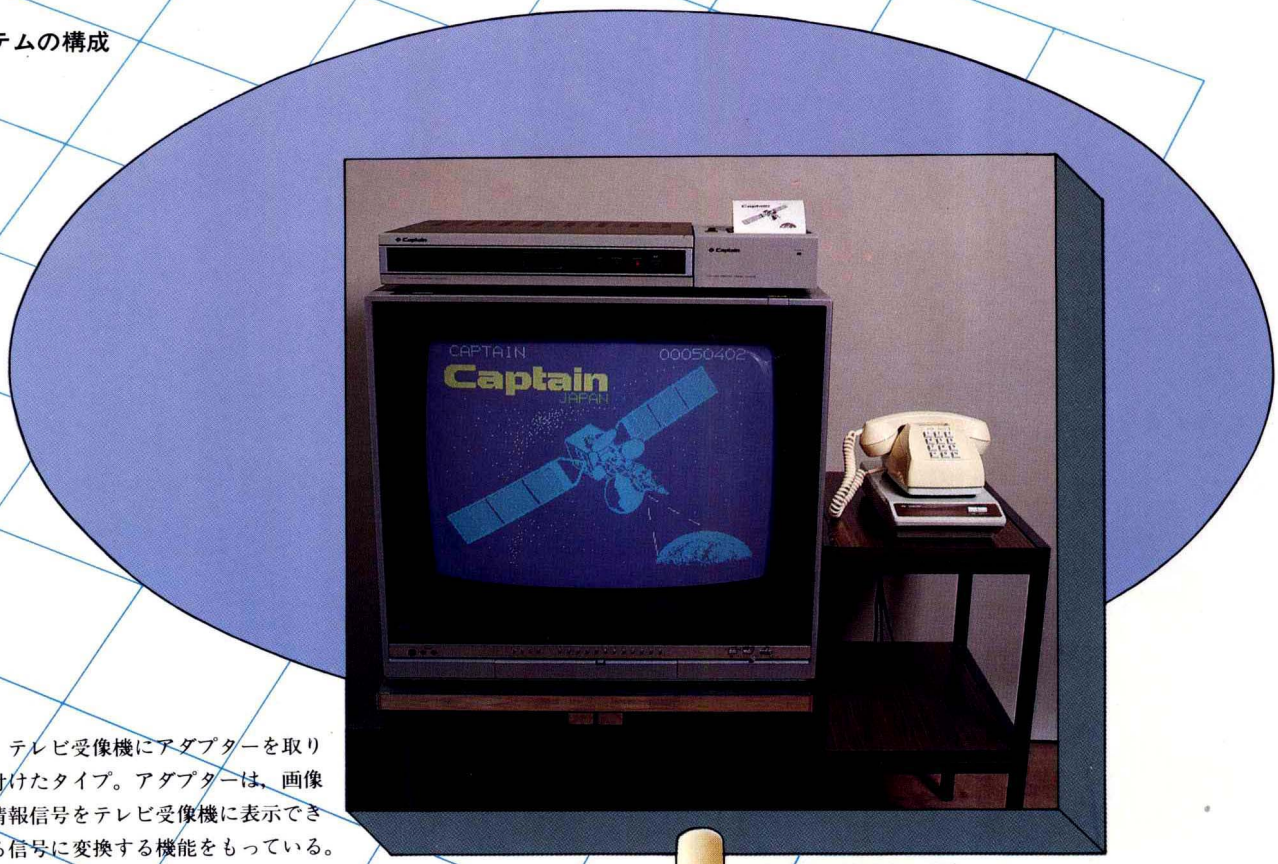
情報化社会の切り札

指導と文／松元正夫

キャプテンシステムは，加入電話回線を利用して，アダプター機能が付加されたテレビ受像機とコンピューターセンターを結び，センターに蓄積された文字図形情報を利用者の要請に応じてテレビ画面に映しだすサービスや，予約・注文などの処理を行なうサービスを提供するメディアである。国際的にはビデオテックスとよばれている。キャプテンシステムはCharacter And Pattern Telephone Access Information Network System（文字図形情報ネットワークシステム）の略称で，郵政省と日本電信電話公社によって開発され，1979（昭和54）年12月から東京で実験が進められている。実用化は1984年秋の予定である。

このシステムには，その会話型機能を利用して利用者が情報の選択をする新しいタイプの画像情報メディアである，ほとんどの家庭に普及しているテレビと電話を利用して経済的にサービスを提供できる，さらに種々のコンピューターセンターと接続することにより多様なコンピューターサービスを画像情報で一般家庭に提供できる，などの特徴がある。

実験システムの構成



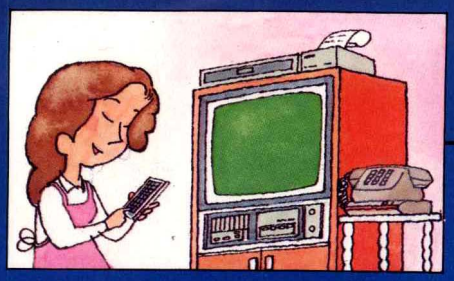
テレビ受像機にアダプターを取り付けたタイプ。アダプターは，画像情報信号をテレビ受像機に表示できる信号に変換する機能をもっている。

家庭(アダプター型)

アダプター機能と表示用のブラウン管を一体としたキャプテン専用の端末で，画面は小さいが使いやすい事業所向き。

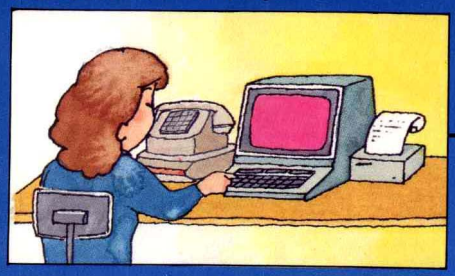
事業所(専用型)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

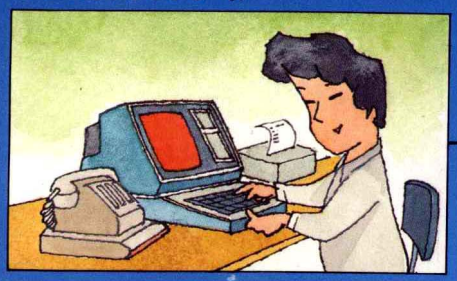


アダプター型　テレビ受像機にアダプターを取り付けて利用する。

組み込み型　アダプターがすでにテレビ受像機に組み込まれているタイプ。



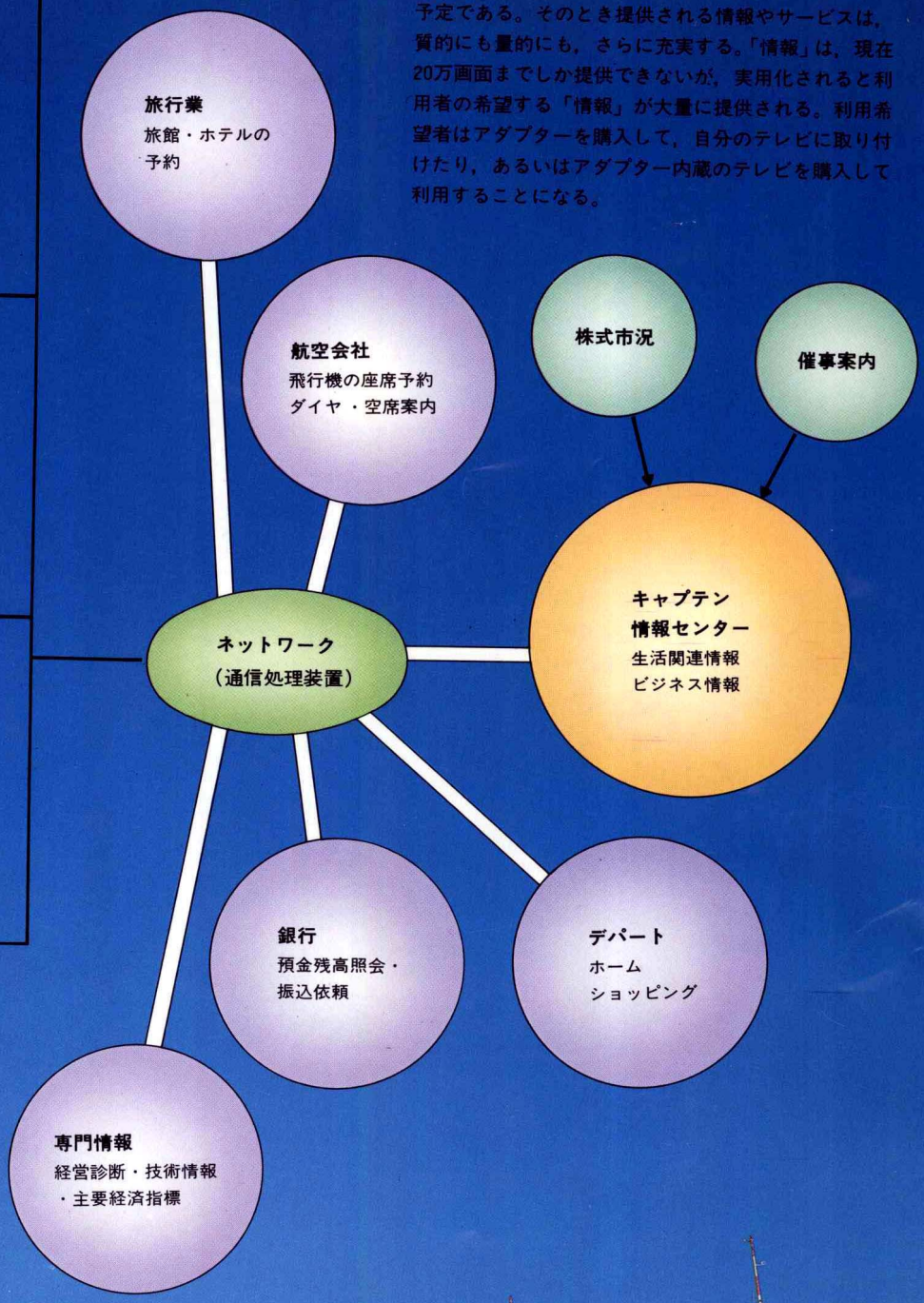
専用ディスプレイ型　キャプテン専用の受像機（テレビ受像はできない。）

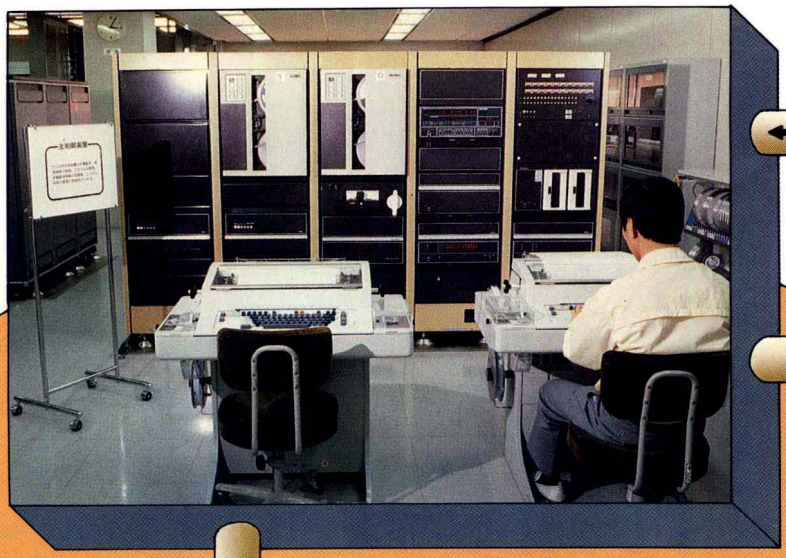


パソコンなどのディスプレイ端末　各種のディスプレイ端末を接続して利用する。

■これからのキャプテンシステムは

キャプテンシステムは，1984年秋から実用化される予定である。そのとき提供される情報やサービスは，質的にも量的にも，さらに充実する。「情報」は，現在20万画面までしか提供できないが，実用化されると利用者の希望する「情報」が大量に提供される。利用希望者はアダプターを購入して，自分のテレビに取り付けたり，あるいはアダプター内蔵のテレビを購入して利用することになる。



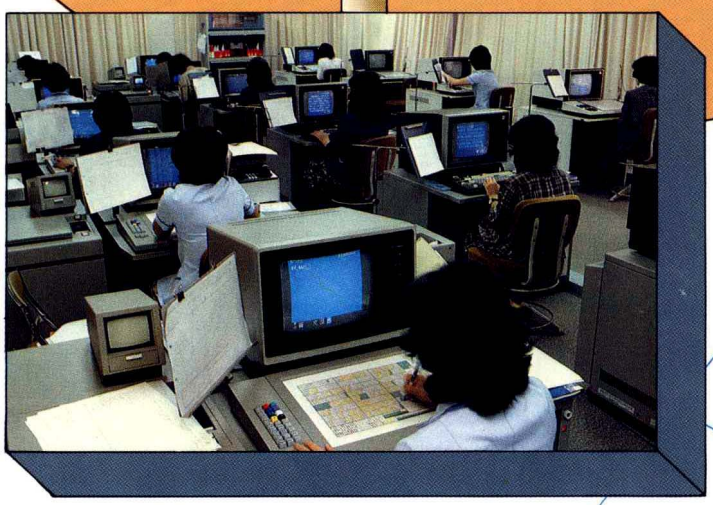


コンピューターによる入力

種々のコンピューターをオンラインでキャプテンシステムセンターに結び，情報の入力・更新を行なう。

キャプテンシステムセンター

文字図形情報をコード化して蓄積し，利用者がリクエストする情報を検索して利用者の端末装置へ送り出す。



人手による入力

オペレーターが一定の様式にもとづいて作られた原稿を見ながら情報入力を行なう。

ネットワーク（電話網）

情報は電話網経由で送られる。電話網では利用者の加入電話番号を識別し，キャプテンシステムセンターに送ることもする。

■いま，キャプテンのサービスは

キャプテンシステムは，現在，実験サービスの段階にある。この実験サービスは，一般家庭と事業所をモニターとし，多くの情報提供者の協力のもとに，1979（昭和54）年12月から東京で進められている。モニターは，無償で貸し出された実験用装置（アダプター型または専用型）により，いろいろなサービスを利用することができる。現在提供されているサービスには，情報検索サービス，注文・応募サービス，会員制情報サービスがある。

情報検索サービスでは，ニュース，天気予報，教養，学習，娯楽，趣味，スポーツなど広い分野の情報約20万画面が提供されている。注文・応募サービスでは，ホームショッピング，クイズの応募，パンフレットの請求，アンケート調査などが行なわれている。会員制情報サービスは，特定の情報を特定の利用者に対してのみ提供するサービスであり，事業所向けの技術や業務の紹介，関連事業所間での業務連絡などに利用されている。

図版作成／日本クリエイト

◆ 別刷目次

《巻頭口絵》●キャプテンシステム
●京都
《別　刷》●北アメリカ……85
●キノコ……153
●キュビスム……253
●ギリシア……409

古都に見る木と竹と水の美意識

構成と文／村井康彦

桓武天皇の遷都の詔に「此の国，山河襟帯，自然に城を作す，この形勝によりて新号を制すべし，よろしく山背国を改めて山城国となすべし。云々」とある。すなわち，新京遷都に当たって京都盆地の景観のよさがうたわれているのである。この美しさは，ひとえに賀茂川・葛野川（桂川）・琵琶湖などの水によるものと言ってよいであろう。大小の河川や伏流水の豊富なことから，平安貴族は南庭に池を掘り，中島を造り，遣水を通した。そこに木や竹や草を植え，それによって，季節の移り変わりを知り，自然の微妙な変化と美しさを味わうことから繊細な感覚を養っていった。あるがままの自然だけではなく，人工を加え，生活の中に巧みに自然を取りこむ術を会得したのである。桓武天皇によって794（延暦13）年京都盆地に造られ，以来1200年近くも連綿と続いた都そのものが，いわば芸術作品でもある。

窮邃亭内部　修学院離宮の上茶屋の中島に建つ小亭で，かぎの手に曲がった上段の間が落ち着いた木の質感を出している。　写真／岩宮武二

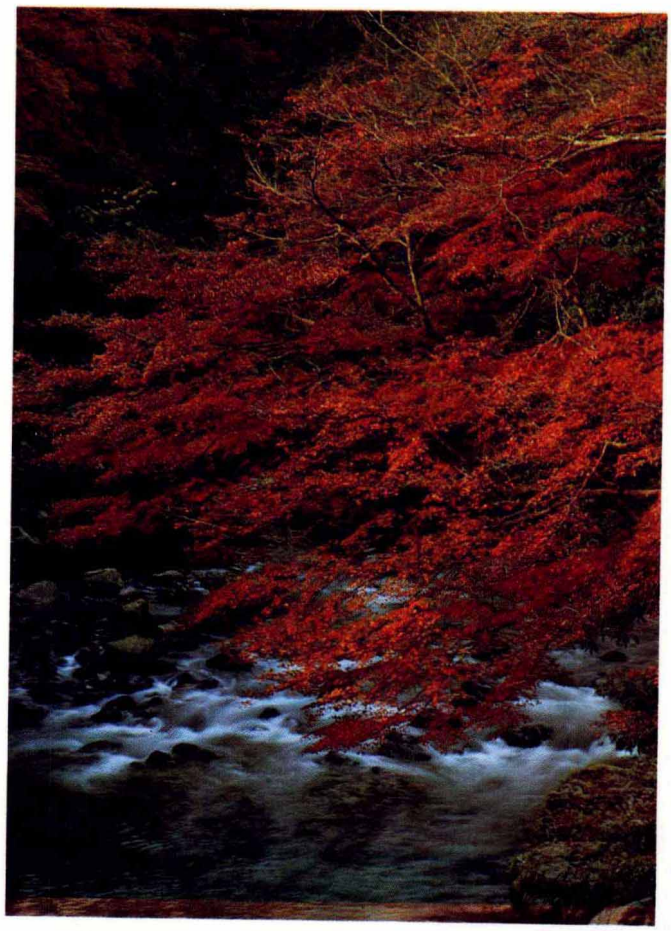
■木に対する感覚

川端康成によれば，北山杉は古都のシンボルであるという。これほど手塩にかけた自然が他にあるだろうか。永い歴史のなかで培われた木に対する研ぎすまされた感覚が，「人工的な自然美」を生み出し，京都文化を象徴しているのである。栂尾・槇尾・高雄を流れる清滝川の紅葉は，京都の秋の色である。この自然のあやなす色彩のシンフォニーを巧みに取り入れた１つに，修学院離宮の紅葉がある。同じカエデを何十種類も植え，微妙な色合いや紅葉のずれを計算している。

（左）　**北山杉**　北山に近世以後植えられたもので，このような景観は比較的新しいものである。枝打ちをされ，真っ直ぐ伸びた１本１本に，育てた人の愛情が感じとれる。伐採されてからも，丁寧に磨かれ，美しい丸太の味を生かした使われ方をしている。

（下）　**清滝川と紅葉**　栂尾を流れる清滝川の白い泡をはむ水流と，微妙な色合いの紅葉は，水と木に恵まれた京都の美しさの１つの原点でもある。

写真／網代正雄・大道治一



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

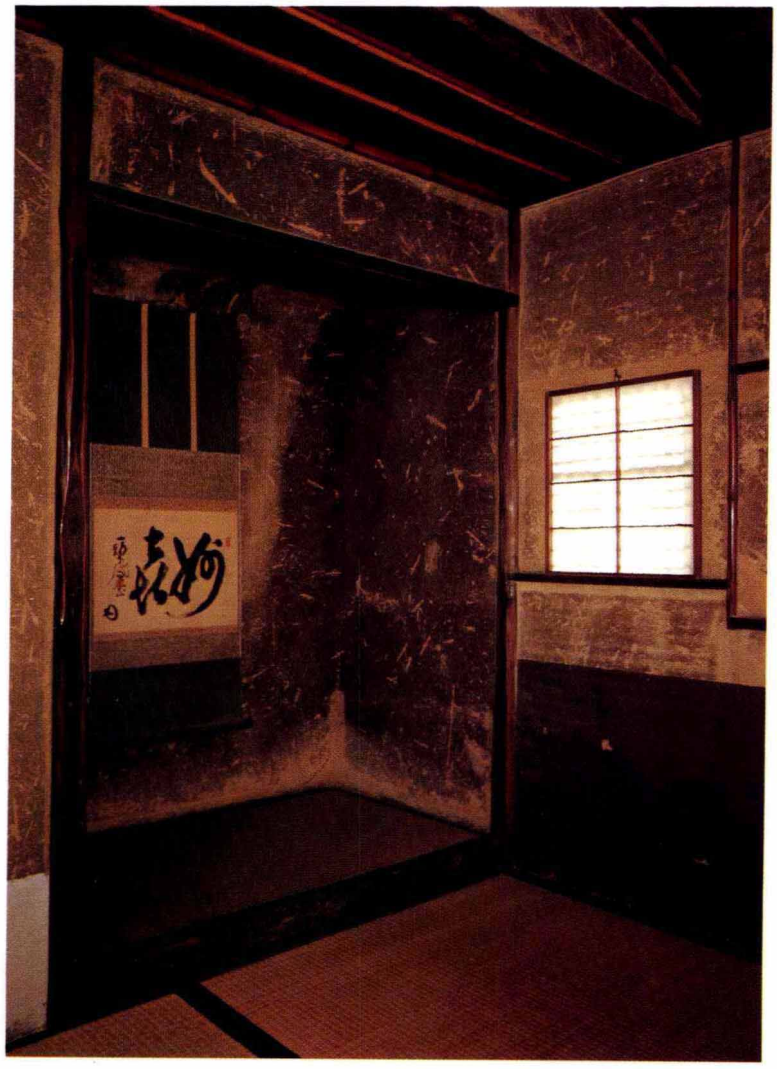
■華麗と閑寂の美意識

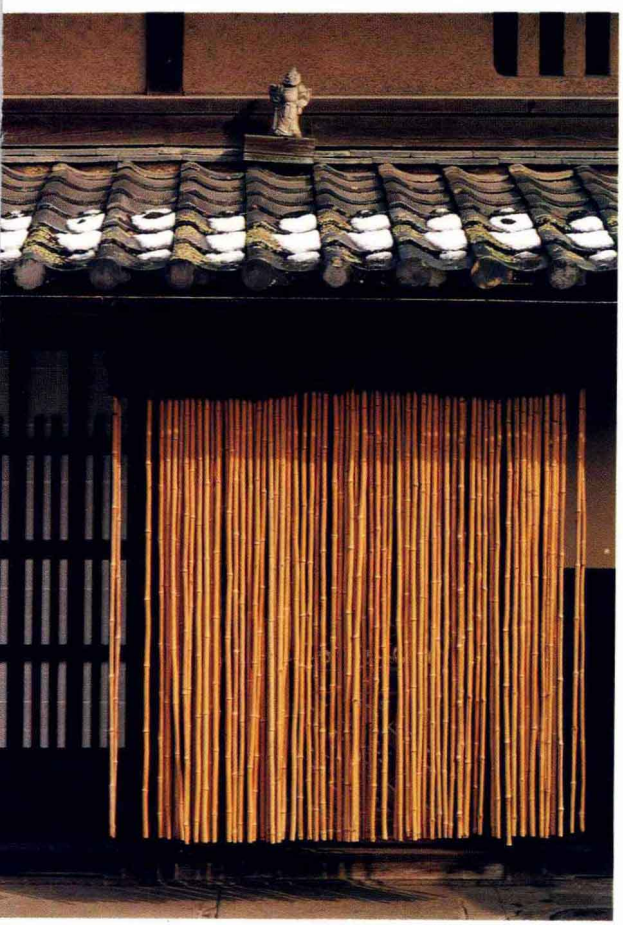
中世後期，京都を中心に２つの建築様式が現れた。１つは書院造であり，１つは草庵茶屋である。前者が華麗の美を象徴しているのに対し，後者は閑寂の美を象徴している。また，前者がストレートな美の表現であるのに対し，後者は抑制された美の表現ともいえよう。しかし、両者には，その根本において経済力に支えられた贅沢な美意識という，共通のものがある。この２つの美意識が，近世に至って総合されたのが数寄屋造であり，これがいまも日本人の住居空間に対する美意識となっている。

（右）**新御殿上段の間と桂棚**　桂棚は桂離宮のシンボルともいわれ，紫檀・黒檀・タガヤサン・ビンロウなど外国渡来の名木を惜し気もなく使って造られている。武士の世界は形式ばる傾向があるが，貴族の世界は美しさを自由に取り入れる傾向がある。桂離宮は，公家的感覚が巧みに生かされた書院造といえよう。

（下）**妙喜庵の待庵**　千利休の作と伝えられ，２畳の狭い空間である茶室に，山里の閑寂がもちこまれている。都市の中に非都市的なものを造り上げ，わびた人工の美を現出したのが草庵茶室である。

写真／岩宮武二・浅野喜市





竹に対する感覚

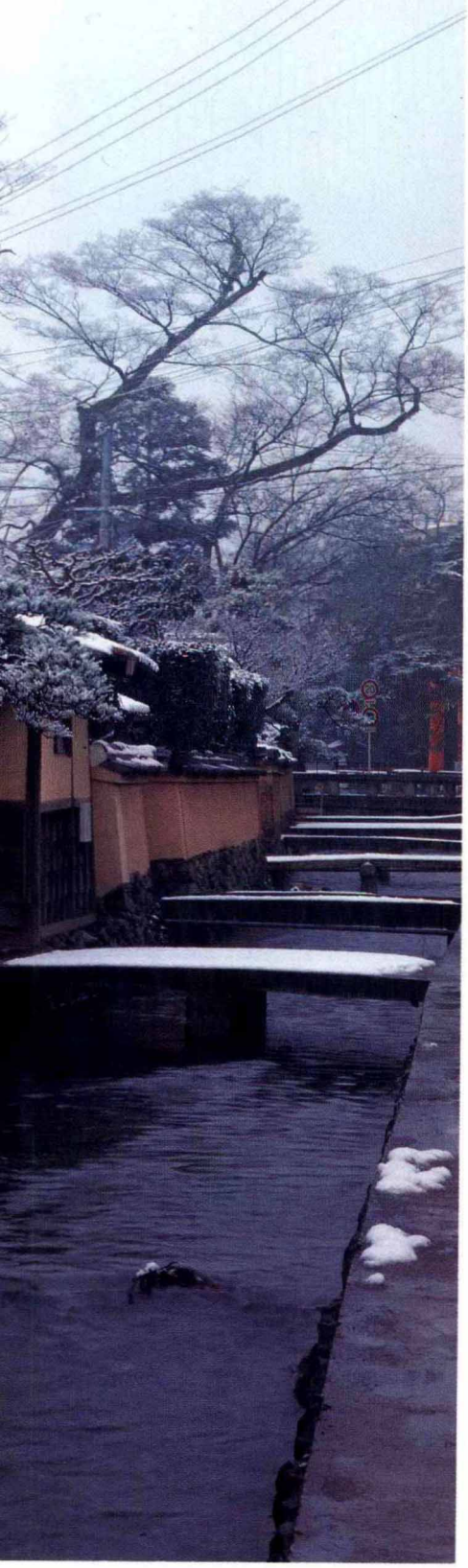
洛西の竹やぶは，古都というのにふさわしい古い雰囲気があり，竹そのものがもつ自然の美しさが大切に保存されている。秋，樹木の葉の色があせ始めるころでも，竹の葉は緑を失わない。竹を割ったようなどと，比喩に用いられるように，竹には木にない独特の性質がある。その特徴を使い分け，住宅建築をはじめ，様々な作意を凝らして美的表現を造り出している。造作された青竹のみずみずしさが時を経て変容する様を，汚くなるととらえるのではなく，古淡の味を巧みに生かすという，事の本質を見抜くしたたかな計算力が古都のそこかしこに生かされている。

（右上） **光悦寺の光悦垣**　竹で造られた垣根にはいろいろの種類があり，周囲の雰囲気にふさわしいように工夫されている。光悦寺の大虚庵茶席を囲む竹垣は，直線と緩やかな曲線の組合せを巧みに生かしている。

（右下） **竹のれんのある民家**　京都の民家の特徴は，千本格子と2階のむしこ窓にある。竹のれんをかけることによって，何気ない風情のうちにも，民家としての印象をより強めている。

（左） **嵯峨野の竹やぶ**　嵯峨野をはじめ西山一帯には竹やぶが多く，渡る風に緑の影を散らしている。その昔，馬1駄分のすぐれた竹は，米1俵と交換されたという。いろいろなものに使われる竹の需要を，洛西の竹やぶが賄っていた。

写真／大道治一・ファインフォト



写真／大道治一・浅野喜市・水野克彦

■水と都人

「ききわたるみたらし河の水清み 底の心をけふぞみるべき」と津守国基が『金葉集』でうたったように，古来日本人は，水は清いもの，水に穢れを払うという思想があった。平安初期の天皇が，賀茂川でみそぎを行ったのもその表れである。玄関先に打ち水をして人を迎えることも同じ思想から来ている。きれいな水を尊び，大切にした形跡は，京都のあちこちに散見される。

（右上） **千本格子の水拭き** 何も塗っていない格子を毎日水で拭くことにより，木の素朴な美しさを保っている。

（右下） **城南宮の曲水の宴** 流れてくる酒杯を取って酒を飲み，詩を詠むという遊びの形式は，中国から伝わったものである。それを風雅な文芸仕立てのものにさせたところに，日本的な受けとめ方がある。

（上） **社家と明神川** 明神川は，古くは御洗川の名で知られた賀茂川の分流で，上賀茂神社でみそぎや祭器を清めるのに用いられた。上賀茂神社の境内を流れ出たあと，社家町の北側を東流する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com